中学校　道徳　部会

部会長　大任中学校　校長　小田　玲子
実践者　鷹峰中学校　教諭　真武　祐二

1　研究主題　　自他を尊重する心をはぐくむ道徳の時間の研究
～自然や崇高なものとのかかわりから自己を見つめさせる実践を中心に～

2　主題設定の理由

（1）社会の要請から

現代社会における科学技術の進歩や物質的な豊かさは、我々の生活に多大な恩恵をもたらす一方で、人と人とのつながりを希薄なものにし、さまざまな事物に対する感謝の心を失わせることにつながっていると言われている。また、インターネットや携帯電話などの情報ツールの発達は、頻繁なやりとりが行われているようでいて、直接的な心と心の通い合うような本当の意味でのつながりには、なり得ていないとも言われている。そんな社会の中で、国全体ではやや減少にむかってはいるものの、いまだに１年間で三万人近い数の自殺者がいる現状を考えてみた時、相互に人間を尊重し、信頼しあう人間愛の精神に溢れた社会になったとは言いがたいのではないだろうか。

さらに、人間は自然の中で生きており、自然の恩恵なしには生きていくことはできないが、ややもするとその意識は薄れ、自然や崇高なもの、生命といった人間の力を超えたものを軽視する社会的な風潮も見受けられる。人は、すべての生命に対する畏敬の念を基盤として、自他を含めた生命あるものすべてに対する感謝の心や思いやりの心を持つことができる。そして、そのことが、より深く自己を見つめながら、人間としての在り方や生き方の自覚を深めていくことにつながるということを考えると、道徳教育の担うものは大きいと言える。

（2）生徒の実態から

近年、人々を取り巻く生活様式が変化し、自然や人間とのかかわりの貧しさが言われている。その中で、中学生も現代社会がかかえる負の部分の影響を少なからず受け、自殺やいじめなど自他の生命や尊厳を軽視する行動をとってしまうこともある。また、中学生の携帯電話の所持率が６０％を軽く超える状況は、決して都会だけの話ではなく、どの地域でも考えられる課題としてとらえなければならない。インターネット電話・チャットなどを利用した生徒間の仲間外しやいじめ、トラブルの深刻化は、社会問題にもなっている。

そうした実態を持ちながら、一方で中学生は発達段階として、具体的な事柄に関しての思考のみならず、目に見えない抽象的な事柄についてもかなり深い思索ができるようになってくる。眼前の事柄をただ表面的にとらえるだけでなく、その奥にある深い意味をとらえることも不可能なことではない。さらに、現在の一つ一つの生命が、それ以前の無数の生命から受け継がれてきたものであることや、自分の生命が他の多

くの存在に支えられており、また大自然が美しく、偉大で、その前では人間の力が小さなものであるといったことも感受性豊かに受け止めることができると考える。

そして、それは、生徒の中に感謝の心や謙虚さ、あるいは人間の力をこえたものへの畏敬の念などをはぐくむために重要な要素であると思われる。中学生の時期に、こうした人間としての生き方の根底にかかわる態度をはぐくむことは、道徳教育の重要な課題となる。

3　主題の意味

（1）「自他を尊重する心」とは

学習指導要領においては、生徒の内面に形成されていく自己及び他者の人格に対する認識を普遍的な人間愛の精神へと高めると同時に、それを具体的な人間関係の中で、日々の実践的態度として伸ばし、それによって人格の内面的充実を図ることを人間尊重の精神の趣旨として示しており、道徳教育はその基盤としての道徳性を養うことを目標としている。

本主題における自他を尊重する心とは、そうした人間尊重の精神に基づいた、自己及び他者の人格や権利、生命を尊重しようとする心のことである。それは、例えば交通機関において、高齢者や体調のよくない方などに席を譲ったり、けがをした友人に肩を貸したりするといった行為として表れるものであると考える。つまり、他人を思いやる心や社会貢献の精神、生命を大切にし人権を尊重する心などの人間としてよりよく生きていく上で必要な道徳的価値を、自分のものとして主体的にとらえた状態を示している。道徳の時間においては、そんな生き方の自覚が意欲的になされるように、生徒の実態に応じて指導方法を工夫をしていく必要がある。

（2）「自然や崇高なものとのかかわりから自己を見つめさせる実践」とは

学習指導要領においては、道徳教育の目標を達成するために指導すべき内容項目を４つの視点に分けて示している。そのうちの３の視点は、自己を自然や美しいもの、崇高なものとのかかわりにおいてとらえ、人間としての自覚を深めることに関するものである。（生命尊重、自然愛・畏敬の念、崇高な人生）といった３つの道徳的価値はいずれも、人間の存在そのものあるいや生命そのものの意味を深く考えた時に見いだされる心の有り様を示している。

弱さや醜さといった不完全な側面を持つ人間は、それを克服していく強さや気高さも内在している。それが人の本質であり、自然や生命、崇高なものとのかかわりの中で、感謝や謙虚さを学び、より深く自己を見つめながら、人間としての在り方や生き方の自覚を深めていくことができる。それは、自他を尊重し、豊かな人間関係を形成するために必要不可欠なものとなると考える。

4　研究の目標

○　田川郡全中学校で、自然や美しいもの、崇高なものとのかかわりから自己の生き方を見つめ、豊かな人間関係を構築することができるように「自他を尊重する心をはぐくむ道徳の時間」の実践を行う。

○　各学校での実践をもとに、３の視点・３つの内容項目に関する実践資料集を作成する。

5　研究仮説

○　３の視点・３つの内容項目に関する実践において、生徒にとって価値をとらえやすい資料の開発や分割・視覚化といった提示方法の工夫、効果的な発問や問い返しの構築といった指導方法を工夫することにより、生徒は、人間としての在り方や生き方について深く考え、自他を尊重した豊かな人間関係を構築することができるようになるだろう。

6　授業の計画

（１）主題名　　弱さの克服　　内容項目３－（３）

（２）資料名　　「ひまわり」　（出典：自分をのばす　中学生の道徳　あかつき）

（３）主題設定の理由

○　本学級の生徒は、明るく元気のいい生活をおくることができている。学校行事においても、その力を発揮して努力することができる。しかし、困難にぶつかった時に、最後までそれを追求する気持ちが弱く、あきらめたり、投げやりな態度をとったりする様子が見られる。また、自分勝手な思いこみから相手の気持ちを考えない発言をしてトラブルを引きおこすといった側面も見受けられる。

　これは、自分自身の生き方を真摯に見つめ、よさを認め、課題を克服していこうという気持ちを十分に持ち得ていないためではないかと考える。

　そこで、人間が内に弱さや醜さを持つと同時に、強さや気高さを併せ持っていることを理解することができるようになってくるこの時期に、本主題を設定する。そして、困難に負けず、生きていこうとする人の誇りある生き方にふれさせ、そのよさやすばらしさを感じ取らせる。このことは、自己中心的な言動をとりがちな生徒に、人間としてのよりよい生き方をする力が自己に内在することに気づかせ、豊かな人間関係を構築する基盤となると考える。

○　人が生きていくにあたって、困難といわれるものに突きあたる場面は、無数にある。人の心へ働きかけるさまざまな誘惑は、時として、人を楽な方向や問題を回避する方向へ流してしまうものである。しかし人は、その際に自らの内にある良心との葛藤を経験する。そして、自らの弱さを克服したい、よりよく生きたいという思いを持つことができる。それこそが、人間のもつ気高さを追い求める心であり、誰しもがそうした心を持っていることを生徒にとらえさせることが大切である。それが、生徒が自らを奮い立たせ、誇りある生き方や困難に負けず人生を切り拓いていく生き方をする原動力となると考える。

○　本資料は、中学生である主人公の女の子が、頭部の大病にかかり、障害を持つことになったことで悩み、死をも意識するようになったが、ある時、自然や多くの人の支えに気づき、生き方・考え方を変えていくという話である。主人公による一人称で表

記された文章であり、困難に出会った戸惑いや苦しみ、前向きに気持ちが変化した様子など、思いの変化がストレートに表現されており、生徒にとってつかみやすい資料であると考える。

本資料の指導にあたっては、困難に負けず、生きていこうする人間の強さや気高さを理解させ、内なる自分に恥じない生き方をしようとする心情を養うことをねらいとする。そのため、資料を共感的に活用し、主人公の気持ちを考えさせることで、価値に気づかせる。

まず、導入段階では、病気やけがで自分のしたかったことができなくなった経験をふりかえらせ、その時の気持ちを交流することにより、学習の方向をつかませる。次に、展開前段では、資料を２つに分割し、各段階における主人公の気持ちが、なぜ変わったのかを考えさせることで、価値の自覚を促したい。そして、展開後段では、主人公の文字で書かれた文章を読ませ、自分の感じ方との違いを考えさせることで、困難に負けずに生きる強さや気高さをとらえさせ、価値の一般化を図る。さらに終末段階では、教師の説話として、校内での生徒の具体的な姿を紹介することで、実践への意欲を高めたい。

（４）ねらい

○　困難に負けず、生きていこうする人間の強さや気高さを理解させ、内なる自分に恥じない生き方をしようとする心情を養う。

○　お互いの考えや思いを交流させることで、これまでの自らの生き方や考え方をより深く見つめることができるようにさせる。

7　指導の実際

○学習指導過程

段階	学習活動と内容	教師の支援
導入	１　自分の日常生活をふりかえり、交流しながら、本時学習の方向をつかむ。 あなたは、病気やけがで自分のしたかったことができなくなった経験はないだろうか。その時、どんな気持ちになっただろうか。	○　自分のしたいことができなくなったときのいらいらした気持ちを交流させ、資料の「わたし」の気持ちに共感しやすくさせる。
	困難にぶつかったとき、人はどう生きるべきか考えよう。	
展開前段	２　資料「ひまわり」を読んで、登場人物の気持ちを考える。	○　段階を追って考えさせるために、資料を前・後

	○　「わたし」の気持ちを考え、自分の意見をまとめる。 手術の後、「わたし」はどんな気持ちになっただろうか。 「わたし」の気持ちは、どんなふうに変わったのだろうか。また、なぜそう変わったのだろうか。	半にわけ、提示する。 ○　資料前半を読み、「わたし」の沈んだ気持ちに共感させ、困難にぶつかった時の人の弱さをつかませる。 ○　資料後半を読み、自分の周囲の人の思いに気づき、強く生きようとする「わたし」の生き方のよさを理解させる。
展開後段	3　資料の内容を受けて、これからの自分の生き方について考える。 「わたし」が書いた文章を読んで、あなたはどんなことを感じただろうか。自分の感じ方と比較して考えてみよう。	○　「わたし」の自筆の文章を読み、障害を前向きにとらえた誇りある生き方をしている姿から、これからの自分の生き方への指針とさせる。
終末	4　教師の説話を聞き、感想をまとめる。	○　人は、だれでも弱さとそれを克服する強さを持っていることを押さえ、実践への意欲を喚起する

8　研究のまとめ

〈生徒の感想〉

・すごく強い生き方だと思う。
・自分にもここまでしっかりした生き方ができるのだろうか。したいけど。
・困難にぶつかった時に、前向きに生きる姿がかっこいいと感じた。
・今までに、いやなことがあった時におちこんでしまったり、人にあたったりすることがあったけど、それだけじゃダメだと思うようになった。

9　成果と今後の課題

（1）成果

○　田川郡の全中学校が、「自他を尊重する心をはぐくむ道徳の時間の研究」という共通テーマで授業実践・研究を行うことで、自己の生き方を深く見つめ、豊かな人間関係を構築するといった生徒が抱える課題の解決へ向け、道徳教育の重要性が再確認された。

○　公開授業及び協議（１月２３日実施）において、指導方法の工夫に関する意見交流・研修を行うことにより、指導力の向上を図ることができる。
○　各学校での実践をもとに、3の視点・３つの内容項目に関する実践資料集を作成（年度末）することにより、今後の道徳授業の改善に役立つものになると考える。

（２）今後の課題
○　「自他を尊重する心」は、短期的な指導によって十分に身につく性質のものではなく、指導の積み重ねが必要不可欠である。今後も道徳の時間の研究を充実したものにしていくことが重要であると考える。
○　道徳の授業づくりに関して、部会としての研修を継続して行うことは、授業力の向上につながると思われる。次年度以降も検討する必要があると考える。

◎　参考文献

○　『中学校学習指導要領解説　道徳編』　文部科学省
○　『心に響き、共に未来を拓く道徳教育の展開』　文部科学省
○　『よりよい実践に結びつく道徳教育の在り方』　福岡県教育委員会　福岡県教育センター
○　『道徳教育の新しい展開』　東信堂　林　忠幸・堺　正之（編著）